

スイスにおける文学キャバレー「プフェツファーミューレ」-エーリカ・マンと父親トーマス(2)-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 久男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8141

スイスにおける文学キャバレー 「プフェッファーミュレ」 — エーリカ・マンと父親トーマス(2) —

田 村 久 男

1930年代にドイツでナチズムの運動が台頭して以降、エーリカ・マンは様々な方法でファシズムと戦うことになる。その最も大きな貢献の一つが彼女によって組織された文学キャバレー「プフェッファーミュレ」の活動であろう。ドイツでヒトラーが首相に任命される直前の1933年1月1日、ミュンヘンの酒場「ボンボニエール」で旗揚げされ、その後、スイスに本拠を移し、そこからヨーロッパ各地に公演を行い、1937年ニューヨークで解散するまでの4年間で公演回数は1000回以上に及んだ。この劇団の立ち上げに関わった弟のクラウスが「ドイツの亡命者たちによる演劇活動の中で最も成功し、最も影響力が大きかった」¹⁾と述べているように、この時期の亡命劇団としては極めて注目すべき活動を行っている。エーリカ・マンはこのプフェッファーミュレを通してナチズムと戦い、しかも単にドイツからの亡命知識人だけでなく、スイス、オランダを始めとする周辺諸国の民衆たちの間にも圧倒的な支持を獲得したのである。1935年、オーストリア出身のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロートは、アムステルダムでの公演を見た後、エーリカに宛てて「あなたの劇団の素晴らしい夕べに感謝いたします。これだけは言わずにはおられないのですが、あなたはバーバリズムに対して、我々作家たちを全員集めたより十倍も多くのことを成し遂げているのです。私自身は少々恥じ入るばかりですが、あなたのおかげで強く勇気づけられました」²⁾と書き

送っている。エーリカ・マンは自ら結成したこの劇団によって「亡命者の歴史に重要な一章を書き込んだのであり、キャバレーの歴史、とりわけスイスのキャバレーの歴史のなかで重要な役割を演じ」⁹⁾ることになったのである。

作家トーマス・マンの長女として生まれたエーリカ (Erika Mann, 1905-1969) は、ワイマール共和国時代のドイツで最初は女優を志す。ミュンヘンでのギムナジウム終了後、ベルリンでマックス・ラインハルトの俳優学校に入り、1927年ハンブルクの劇場で共演した俳優グスターフ・グリュントゲンスと結婚 (翌年解消)、ミュンヘンではシラーの『ドン・カルロス』のエリーザベト役やバーナード・ショーの『聖女ジャンヌ・ダルク』などに出演、また映画でも脇役ながら『制服の処女』(1931年)の女教師役の一人として出るなど、着実に女優としてのキャリアを積んでいた。また俳優業の合間には、弟クラウスといっしょにアメリカを経由しハワイ、戦前の日本、中国をめぐる世界旅行、1932年にはヨーロッパで開かれた10000キロレースに子供のころからの親友リッキィ・ハルガルテンとともに愛車フォードで出場し見事優勝を果たしている。旅行記や子供向けの絵本など創作にも手を染めているが、政治的な傾向はほとんど見られず、いわばワイマール共和国時代の自由な雰囲気を楽しんだ典型的な「アンファン・テリブル」であった。

彼女は、アメリカに移った後、弟クラウスとともに亡命者たちの実態を紹介した『生への逃走』(Escape to Life, 1938)という本を書いているが、その冒頭に載せた自分へのインタビューで「あなたが政治に対して興味を持つようになったのはいつか」という間に「私はドイツにいたときはほとんど最後まで政治には全く興味がありませんでした。政治は政治家の仕事であって、他人の問題に私が口出しすべきではないという誤った考えをもっていたのです。身近でも多くの人がそう考えていました。しかし、そこでヒトラーが政権の座に就いたのです」¹⁰⁾と答えている。

女優として順調にキャリアを積み、政治にはまったく関心のなかったエー

リカ・マンがその後、政治と向き合うことになるのはドイツでのファシズムの台頭とナチス政権の成立という時代の変化によるものだった。彼女が一転して反ナチスの闘士に変身する直接のきっかけとなったのは、ヒトラー政権成立の一年前に起こった一見些細な出来事である。これは国家社会主義者による彼女に対する挑発行為であり、アンドレア・ヴァイスは「もしナチスの攻撃によって身を守らなければならない状況がなかったならば、おそらく彼女は政治には全く無関心のままだっただろう」⁹⁾と述べているように、この出来事に続く一連のファシストたちの側からの挑発がきっかけとなって、エーリカ・マンはナチスに対する激しい憎悪を抱くことになった。

1932年1月13日、ミュンヘンで「国際協調世界婦人連盟」、「母と婦人教育者の世界平和連盟」の共催になる集会「平和と自由のための婦人連合」が開かれる。この集会自体は翌月2月にスイスで開かれることになっていたジュネーブ軍縮会議を支持する多くの平和集会の一つであったが、エーリカは、この集会の主催者の一人であったコンスタンツェ・ハルガルテンに頼まれ、会議で平和を訴える新聞記事を朗読した。ミュンヘンの平和主義運動家コンスタンツェ・ハルガルテンはマン一家とも親しく、エーリカとともに10000キロ自動車レースに参加した幼なじみリッキの母親であった。つまり俳優であったエーリカはいわば家族の友人の頼みでこの会議に参加したのである。会議当日、メインの講演者でフランスの女性平和運動家マルセル・カピィの演説に引き続いて、エーリカが平和を訴えるアピールを朗読した際、反対の立場で会場につめかけたナチス突撃隊員による妨害行為が行われた。当日会場に居合わせた弟クラウス・マンは、アメリカ亡命後に執筆した回想録『転回点』(1942年)の中で、その日ナチス党の若者たちは壇上のエーリカに対し「裏切り者！ 恥さらし！ 我々は国家の名において抗議する」と叫び、その後「激しい流血沙汰の殴り合い」が起こったと書いているが⁹⁾、実際にはその場の示威行為は比較的穏やかなものに留まったようだ。クラウスは当日の日記に次のように記している。

場馴れしたフランス人女性の講演は立派な出来で、弁舌鋭く、大胆だった。もっとも通訳はひどいものだった。「子犬」(コンスタンツェ・ハルガルテンのこと)も大変控えめだった——ナチスの若僧たちによる腹立たしい妨害、演壇に押しかけようとした。しばらく混乱。エーリカの顔は蒼白であったが、彼女の締め言葉は非常に感動的で印象深く、満場の拍手喝采を受ける⁷⁾。

エーリカは、後に自分が政治と関わりを持つきっかけとして繰り返しこの事件に言及し、その際、しばしば誇張を交えて「身に危険を感じた」とも回想しているように、初めて自分自身に加えられたナチスの攻撃は彼女に強い印象を残したと思われる。彼女に対するナチスの攻撃はこの場にだけに留まらず、三日後、ナチス党の新聞フェルキシャー・ベオーバハター紙は悪意のこもった皮肉な論調でこの集会について論評し、その中で、特にエーリカ・マンを槍玉に挙げる。

とりわけ不快な場面はエーリカ・マンの登壇であり、この自称女優は自らの「芸術」を平和至上主義に献げたのである。彼女の立居振舞はまるで思い上がった放蕩息子のようで、「ドイツの将来」について彼女一流の途方もない妄言を説くにいたった。……「マン家」問題は直にミュンヘンのスキャンダルに発展し、いずれは清算されなければならない問題でもある⁸⁾。

さらに同じナチズム系のイラストリールター・ベオーバハター紙とディー・フロント紙も、当時、ワイマール共和国時代に進歩的な女性の間で流行していたショートカットの彼女の髪型を揶揄し「必ずしも頭らしくない物体の上に生えた髪の毛は男性風に短く刈られており、つまりは、外見からして既に救いようのない思考の錯乱を表している」と人身攻撃に及ぶ。後者の誹謗に対してエーリカは名誉毀損で法的措置に訴え、裁判で勝訴することになる⁹⁾。

当時、大きな町の劇場で幾つか重要な役を演じていたとはいえ、まだ駆け出しの女優に過ぎず、また、この平和集会に参加する以前には政治的な活動

とまったく関わりを持ったことのなかったエーリカに対し、ファシストたちがこれだけ執拗な攻撃を仕掛けたのは、彼女自身よりもむしろ、この時期ナチズムに対して批判的な発言を繰り返していた父親トーマス・マンに対する彼らの苛立ちがあった。彼女は、ノーベル賞作家で世界的に知られた父親トーマス・マンのいわばスケープゴートとされたのであり、父親の身代わりになったといえる。

第一次世界大戦中『戦時随想』(1914)や『非政治的人間の考察』(1918)等の著作で、最後まで帝政ドイツを擁護し続けたトーマス・マンは、1918年のドイツ革命によってドイツ帝国が崩壊しワイマール共和国が成立した後もしばらくは保守主義を代表する人物と見なされていた。しかし1922年初代共和国大統領エーベルトも列席した劇作家ゲルハルト・ハウプトマン60歳の記念式典での講演「ドイツ共和国について」で公式に共和国支持の態度を明らかにし、右翼、保守主義者たちからその「意外で筋の通らない、軽率でさえある変節」¹⁰⁾が批判されることとなった。1929年ノーベル文学賞が与えられ彼の政治的な発言はますます重みを増すことになり、同時に反対派の攻撃もいっそう強まった。同じ年にアメリカ、ウォール街で始まった世界恐慌はヨーロッパにも波及する。ドイツも最大600万ともいわれる大量の失業者を抱えて深刻な不況にあえぎ、共和国政府が有効な政策をとり得ずにいる中で、大衆の支持を得たナチス党は、翌1930年9月の総選挙でそれまでの12議席から一気に107議席を獲得し大躍進を果たす。翌月の10月17日、マンはベルリンのベートーベン・ザールで行われた「ドイツに告ぐ——理性に訴える」と題した講演で、政党の名前こそ挙げないもののドイツでのファシズムの運動に警鐘を鳴らす。この講演中もナチス党員の妨害で会場は混乱し、マンは友人の音楽家ブルーノ・ワルターに助けられ楽屋口から脱出している。また1932年の夏には、彼がナチスの蛮行を激しい調子で批判した論説を新聞に発表した直後に、脅迫状とともに焼け焦げた、彼のノーベル文学賞受賞の主な対象作品としてあげられた『ブッデンブロック家の人々』がミュ

ンヘンの自宅に送りつけられるという事件も起こっている。エーリカ・マンがファシストたちの攻撃の対象となったのは、この時期政治的な発言を繰り返していた父親トーマスはもちろん、共産党とも近く早くから全体主義の危険を訴えていた伯父ハインリヒ・マンや弟クラウスも含めた「マン一家」への彼らファシストたちの苛立ちがあったのである。

ナチスの機関紙を相手取った裁判で勝ちを取めたことで彼らの敵となったエーリカが、さらにファシストたちの憎しみをかき立てたのは同じ年に起こした第二の裁判である。この年の夏にヴァイセンブルク市の野外劇場との契約が解除された際、契約義務違反を理由にエーリカは劇場の主催者であった市交通局を相手取って法的措置に訴える。野外劇場との契約をめぐるこの裁判について、マルティン・ヴァイヒマンは「エーリカ・マン事件」と名付け、詳細なリサーチに基づき、すでにナチス政権発足以前に劇場関係者が進んでナチスに同調した例として注目している。ヴァイヒマンによれば事件の経緯はおよそ以下のようなになる¹¹⁾。

1929 年来、バイエルン州のヴァイセンブルク市は観光客をあてこんで、毎年の夏「ヴァイセンブルク森林劇場」で野外劇を開催していた。1932 年になって、市長であったヘルマン・フィッツはナチス系の文化団体と協力してこの催しの規模をさらに拡大しようとする。一方、当時、劇場監督の座にあったエーゴン・シュミットは、ナチス党とのトラブルを知らぬまま、出演俳優の一人としてエーリカ・マンと契約を結ぶ。ナチスの文化団体は、エーリカがナチスにとって好ましからざる人物であり、純ドイツの文化事業に「ユダヤ人」エーリカ・マンがふさわしくないことを理由に市に協力拒否の脅しをかける。想定された森林劇場の観客はナチス団体が大きな部分を占めていたため、市はボイコットを恐れ、結局、彼女に契約を一方的に解除する通告をする。これに対し、エーリカは期間中の出演料の支払いと慰謝料を求めた裁判をおこし、その結果、赤字のために支払い不能に陥っていた森林劇場は資産差し押えによって破産宣告を受けることとなった¹²⁾。この森林劇場

のそもそもの企画発案者であったヴァイセンブルク市長フィッツは、調停の中であくまでも妥協しようとはせず、ユダヤ人の法廷代理人とともに劇場資産の差し押えを強行し自らの事業を破産に追い込んだエーリカへの憎悪をつのらせ、党に働きかけナチス系の新聞を動員して、マン一家に対する大規模な攻撃キャンペーンを展開するにいたる。マン一家は、ドイツの文化事業に全く敬意を払おうとしない利己主義者であるというのだ。

二度の裁判には勝ったものの、その過程でナチス党を敵に回し、また、無用のトラブルを恐れる劇場からのオファーを失うことになったエーリカが¹³⁾、次にナチスに対抗する手段としたのが、自ら組織した政治的キャバレー・プフェッファーミュレだった。このキャバレーという演劇形態は、もはやドイツにおいて劇場との契約の機会が大幅に制限されることになった女優エーリカにとって、舞台上演する機会を与えただけではなく、自ら台本を書くことで今や彼女の敵となったナチスと対決するための有効な手段となったのである。

プフェッファーミュレの旗揚げ

エーリカ・マン自身の証言によれば、もともとこの新しいキャバレーは「全く無邪気で、ほとんど偶然から始まった」ものであり、本来の発案者は、エーリカと弟クラウスのベルリン時代の友人、ピアニストのマグヌス・ヘニングだったという。1932年の秋頃、ヘニングが二人に対し「かつてヴェーデキントたちが出演していたミュンヘンの古い寄席酒場の〈ボンボニエール〉が最近低迷していて、出ているのは三流、四流のキャバレーだ。我々が出演してもっといいものを出そう」¹⁴⁾と語り出したことに始まった。かつてミュンヘンではフランク・ウェーデキントやオットー・ファルケンベルク等による「十一人の死刑執行人」をはじめとして「ジンプリチシムス」など伝説的ともなった著名なキャバレーが華やかに活動していたにもかかわらず、ベル

リンに押されてミュンヘンのキャバレー文化は見る影もない。ヘニングの提案は、このような「ミュンヘンの文化的窮状」¹⁵⁾を立て直すべく、ヴェーデキントゆかりの寄席酒場ボンポニエールの伝統を引き継いで、新たにもっと質の高いキャバレーを立ち上げよう、というものであった。音楽家マグヌス・ヘニング (Magnus Henning, 1904-1995) は、プフェッファーミューレの旗揚げから解散に至るまで全期間にわたって公演のピアノ伴奏を担当することになるが、劇団がアメリカで解散した後は、再びミュンヘンに戻ってキャバレーでピアノを弾き、戦争中はドイツ軍に加わって敗戦を迎える。このことから、ヘニングの政治的な意図はそれほど強くなかったと考えられ、彼の構想は、純粋にキャバレー文化を愛する気持ちから発したものであった。しかし、当時裁判等でファシズム団体と対立していたエーリカがこのヘニングの提案に乗ったことで、ミュンヘンの新しい「文学キャバレー・プフェッファーミューレ」は明確な政治性を帯び、回を増すごとに反ファシズム色をますます強く打ち出していくこととなったのである。この企画に、同じくエーリカの親友であったテレゼ・ギーゼが加わり、この三人を中心に俳優アルベルト・フィシェルやズィビュレ・シュロス、ダンサーのクレール・エックシュタインら約十名のアンサンブルが結成された。エーリカ・マンは全プログラムにわたってテキストの大部分を書き¹⁶⁾、舞台での進行役 (Conférence) も兼ねテレゼ・ギーゼは演出¹⁷⁾、ヘニングは作曲とピアノ伴奏を担当した。「プフェッファーミューレ」(Pfeffermühle「胡椒挽き」) という名前は、辛辣な政治批判を信条とするこの劇団に相応しいものとして、父親トーマス・マンの発案によるものであった。

設立来のメンバーの中で、エーリカ、作曲家兼ピアニストのヘニングとともに最も重要な役割を果たしたのはテレゼ・ギーゼである。クラウド・マンが「〈プフェッファーミューレ〉には二つの魂があり、一方の魂はテレゼ・ギーゼだった」¹⁸⁾と表現しているように、このキャバレー劇団の異例ともいえる大成功は、劇団を組織し統率したエーリカと並んでギーゼの演技力

に負うところが大きい。ユダヤ人であったギーゼは、演出家オットー・ファルケンベルク率いるミュンヘン・カンマーシュピール劇場で国民的な人気女優となり¹⁹⁾、そこでエーリカと知り合い、スイスに亡命した後もマン一家の家族の親しい友人の一人となる。プフェッファーミューレがアメリカで解散した後は再びチューリヒに戻り、フェルディナント・リーザー、オスカー・ベルテリンのもとで黄金時代を築き上げたチューリヒ劇場の女優として、ブレヒトの『肝っ玉おっ母とその子供たち』やデュレンマットの『物理学者たち』『貴婦人故郷に帰る』等々の初演でドイツ演劇の歴史に重要な役割を果たす。さらにはスイス映画『最後のチャンス』(Die letzte Chance. レオポルト・リントベルク監督、1944年制作)やデュヴィヴィエ監督の『アナ・カレニナ』(ヴィヴィアン・リー主演、1948年制作)等の映画にも出演し、ドイツ語圏の国境を越えた世界的な名声を獲得する名女優となる。プフェッファーミューレでは「愚かさ」「X 婦人」「私が欲するから」を始めとする重要なナンバーの多くが彼女によって演じられている。

エーリカ・マンにとってはキャバレーの台詞および歌曲の作詞は初めての挑戦であり、また、女性が案内役を勤めるキャバレーもドイツではこれが最初であったという。しかし、1933年1月1日、ミュンヘンのボンボニエールでの最初の公演は大成功であり、切符は初日から連日完売、毎晩のように満席が続くという人気となった。寄席酒場ボンボニエールは、ナチス党が旗揚げの地として選び、その後も国家社会主義者たちの拠点となっていた酒場ホーフプロイハウスに隣接し、そこでヒトラーが演説する間、ボンボニエールでプフェッファーミューレは文字通り「壁を接して」ファシズム批判を繰り広げることになったのである。

ボンボニエールでの公演は大好評のうちに1月と2月の二ヶ月間続き(第1プログラム、第2プログラム)、その後一月間の準備を経て、4月1日からもっと大きな劇場に場所を移して第3プログラムが予定され、ベルリンでの公演旅行も予告されていたにもかかわらず、ドイツを捨て、スイスに拠を移

さなければならなくなる。それは、ちょうど時を同じくして起こったヒトラーのナチス政権成立のためであった。

既に述べたように、1929年来の世界恐慌のおおりに受け、大量の失業者を抱えて深刻な不況にあえぐドイツでは、ベルサイユ条約の破棄と、一般の国民の間にも不人気であったワイマール共和国の打倒を党是に掲げたヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党、いわゆるナチス党が急速に国民の支持を集めることになった。1930年9月の総選挙で一気に107議席を獲得し大躍進を果たしたナチス党は、1932年7月の総選挙でさらに議席数を230にまで増やす。同年の11月の選挙で若干得票数を減らしたものの翌1933年、エーリカ・マンが新しい劇団プフェッファームューレをミュンヘンで旗揚げした四週間後の1月30日、共和国大統領ヒンデンブルクによって党首ヒトラーが首相に任命される。当初ナチス党からの入閣は首相ヒトラーを含めて二名であり、貴族、経済人、軍人を含む連立政権であったが、翌2月27日に起こった国会議事堂の放火事件を機に大統領緊急特令に基づく非常事態宣言を発し、ドイツ全土で議事堂放火の首謀者とされた共産党員を一斉検挙、三月の総選挙を経た議会でヒトラーは全権委任法を通過させて独裁制を敷くのである。このような首都ベルリンでの政権交代の影響は直接ミュンヘンにも及び、それまでベルリンの新しい政権に対して抵抗姿勢を貫き、マン一家にも好意的であったバイエルン国民党のハインリヒ・ヘルトが更迭され、義勇軍を率いてミュンヘン共和国を鎮圧した国家社会主義者フォン・エップが新たにバイエルン州知事となる。トーマス・マンは、父親の身の危険を案ずるエーリカのすすめで休暇滞在中のスイス、アローザにそのまま留まり、エーリカ自身もドイツを離れ、新たにスイスでプフェッファームューレを再スタートさせることになった。

スイスでのブフェッファーミューレの活動

それまで「亡命者たちの天国」といわれ、これまで外国からの亡命者に寛大であったスイスも 1930 年代に入ると深刻な経済不況に苦しみ、また、政治的には共産主義の影響をうけた労働運動の過激化に対する不安から、それまでは外国人に対して開放的だった政策をあらため、内に向けた保守化の方向に転換していた。当時の政府にとって脅威と感じられたのは、ファシズムよりもむしろ共産主義運動であり、大量のユダヤ人の流入に対する「過度の異国化」と、「頹廢した」ワイマール文化に代表される「文化ボルシェビズム」の自国での蔓延であった。また当初は一般国民の間でも、ドイツでワイマール共和国時代の政治的混乱を克服し、最大の懸案であった失業者問題を急速に解決しつつあったヒトラーの政策を羨望する雰囲気も強く、むしろドイツを捨てた亡命者たちは愛国心に欠けた祖国の裏切り者というネガティブなイメージで見られることも多かった。従来からスイスで活動していた国家主義者たちにとっても、隣国ドイツの成功は、彼らに「国家社会主義の春」をもたらすことになったのである。

ナチス政権成立によって発生したドイツからの未曾有の人口流出に対して、スイス政府がとった方針は、亡命者には他国の政府批判を含む一切の政治活動を禁止し、また不況下で亡命者と競合して市場が狭まることを心配する労働組合の要請もあり、原則としてスイス国内で亡命者たちの生産活動を認めないというものであった。

エーリカは旧メンバーの内、彼女とともにドイツを離れた M. ヘニング、Th. ギーゼ、S. シュロスその他、外国人警察局との交渉で提示された条件に従ってローベルト・トレッシュとピアニストのヴァレスカ・ヒルシュの 2 名のスイス人と契約し、さらにロシア国籍のイーゴル・パーレンやダンサーのロッテ・ゴスラー（1934 年から）らを加えた新しいメンバーで、チューリ

ヒの下町ニーダール通り（Niederdorfstr.）の小さなホテル・レストラン「ヒルシェン」を拠点に、1933年9月30日に亡命後最初の公演を行いスイスでも大成功を収める。客席はほぼ連日満席となり、10月いっぱいチューリヒで公演したあと、続く11月、12月はバーゼル、ベルン、シャフハウゼン、ザンクト・ガレン、ヴィンタートゥールとスイスを巡回、翌年の第二プログラムでは再度バーゼルとベルンを始めとするスイス各地で客演したほかオランダ公演でも大成功を収める。

チューリヒでの初日の公演を家族とともに見に行った父親トーマス・マンはその日の日記に「観客は好意的に歓迎し、ほとんど嵐のごとき大成功、我々にとっても喜ばしい限り。何度も舞台に呼び出され、たくさんの花束。エーリカの創作力と組織力は驚くばかり。[...] ギーゼが見事、既に観客たちの人気者」(9月30日)と記し、また「昼食はエーリカ、ギーゼと。〈プフェッファーミュレ〉の成功は完璧、チューリヒの新聞は一致して賞賛、観客は毎晩殺到。私にとっても心からの喜び」(10月4日)²⁰⁾とあるように、新聞各紙も概ね好意的な記事を書いている。特にバーゼルでの成功の様子は「会場に足を踏み入れてまず驚かされたのは、観客だ。ホールは破裂するほどの満員で、たくさんの芸術家の卵たち、その傍らにわずかに本物のバーゼル市民がいるといった感じだ。チューリヒでの輝かしい成功を、ここバーゼルでも逃すまいということだ」(バーゼル国民新聞)とかなり大げさに伝えられているが、翌年、一月間に渡って行われた二度目のバーゼル公演でも、エーリカ自身が母親に宛てて「連日売り切れ(450名のホールが)です。誰かが言っていましたが、アルザス中の人間が自動車で見に来てくるそうです。バーゼルにはこんなたくさん人はいないはずですから、それも不思議とは思いません」²¹⁾と報告しているように、その盛況のほどが想像できる。

このような大成功を収めた理由はどこにあるのか、数あるナンバーの中から、エーリカの詩にヘニングが曲をつけ、テレゼ・ギーゼによって舞台上で演じられた「X 婦人」を例にとって考えてみたい。

Ich heie X und habe einen Laden, Drin es Verschiedenstes zu kaufen gibt.	私の名は X, 店を持ち そこでいろいろなもの売ってます
Ich will im Ganzen keinem Menschen schaden, —	私は決して誰にも損はさせません
Ich und mein Mann, wir sind auch recht beliebt.	私と夫は、とても好かれているので す
Man lgt und man betrgt sich durch die Woche, Am Sonntag reicht es dann zu Wein und Huhn.	年から年中、嘘をつき欺し合い 日曜日にワインと鳥肉で満足します
Mit Ehrlichkeit hat unsere Epoche, Und mit Charakter, ja nichts mehr zu tun.	正直や性格の良さなどは 我々の時代には必要ないのです
Es krht kein Hahn danach, Es krht kein Hahn danach, Die Hhner lachen leis. Es schert sich keine Katz, Weil das doch jeder wei; Wer's Pech hat, na, der hat's.	その後で鳴く雄鳥はいません その後で鳴く雄鳥はいません 雌鳥たちが密かに笑います 逃げる猫もいません 誰だって知っていますから 不運な奴はしょうがないのです
Mein Mann betrgt mich oft, das wei ich immer, Und ich betrge ihn in mancher Nacht. Er mietet sich zu diesem Zweck ein Zimmer. Ich und mein Freund, wir haben's oft belacht.	夫が時々私を欺いているのは知って います 私も夜中によく夫を欺きます 夫はそのために部屋を借りました 私は恋人としょっちゅう笑ったもの です
Dabei betrgt mich der mit meiner Jngsten,	しかしあの男は末娘といっしょになっ て私を欺きました

Die lügt mich an, das lebenssücht'ge Ding.	若い盛りの娘は私に嘘をつきます
Ja, ja, ich weiß, es war vergang'ne Pfungsten,	知ってます, この前の降臨祭に初めて
Daß sie zum ersten Male zu ihm ging.	娘がああ男のところ忍んでいった のです
Es kräht kein Hahn danach, ...	その後で鳴く雄鳥はいません…
Und gibt es Krieg, dann muß es ihn halt geben, —	戦争が起きるのは, 仕方ないことで す
Wozu denn sonst das Militär im Land?	でないとな国が軍隊を持っている意味 がありません
Die Industrie will schließlich weiterleben.	結局のところ産業も生き伸びたいで しょう
Ich und mein Mann, wir haben's längst erkannt.	私も夫も, とっくに気付いていまし た
Wenn wir daheim sind und am Radio hören,	家でラジオをつけて
Wie das so funkt und tut aus manchem Reich.	多くの帝国からの放送を聞きます
Und andere Leute lassen sich nicht stören, —	他の国の人々は気にしないでしょ うが
Nur Österreich selber ward ein bißchen bleich:	オーストリアだけが少し青ざまし た
Es kräht kein Hahn danach, ...	その後で鳴く雄鳥はいません…
Wenn wir's nicht hindern, sind wir schnell verloren, —	もし防がなければ, 私たちはたちま ち破滅です
Der Vogel Strauß macht große Politik;	駝鳥が大きな政治を行っています
Den Kopf im Sand bis über beide Ohren,	砂に両耳まで顔を埋め陰気な声で

Zwitschert er dumpf: „Ich bin nicht für den Krieg.“ 「戦争には反対だ」と唱えています

Am Ende liegt die Welt in Schutt und Trümmern,
Die wir so listig-tüchtig aufgebaut. 最後世界は瓦礫の山となって
私たちが必死で築き上げた店も灰になります

Das Giftgas schwelt in unsern guten Zimmern — 毒ガスが部屋に漂い

Ich und mein Mann, wir geben keinen Laut. 私も夫も声を立てません

Jetzt krähn die Hähne all, 今や雄鳥がいっせいに叫びます
Um's blut'ge Morgenrot, — 血に染まった朝焼けの中
Die Hühner weinen leis. 雌鳥たちは小声で泣き
Zu spät schert sich die Katz, 猫は逃げ遅れました
Die es nun gründlich weiß: やっと身をもって気づいたのです
Wer's Pech hat, na, der hat's.²²⁾ 不運な奴はしょうがない、と

このナンバーは、スイスでの最初のプログラムで歌われ、その後の公演でも残されギーゼの当たり役の一つとなる。チューリヒで初めてプフェッファームューレのメンバーに加わり、そこでたまたま公演を見に来ていた亡命演出家レオポルト・リントベルク（戦後チューリヒ劇場総監督）と知り合い妻となるスイス人ヴァレスカ・ヒルシュ＝リントベルクは次のように回想している。

その晩のクライマックスは何と言っても〈X 婦人〉の歌でした。初めのうち観客たちはギーゼの滑稽な演技に身をよじらせて笑っていましたが、しかし歌詞は急展開して最終節では笑いは沈黙に変わり、誰一人声を立てず、怖いくらい厳粛な雰囲気となりました²³⁾。

キャバレーのプログラムはメロディーをつけられた歌曲や朗読、寸劇、ダ

ンス、そしてそれを繋ぐ進行役エーリカの「口上」によって組み立てられ、例えば、ギーゼの演技と並んで表現主義的な前衛舞踊家ロッセ・ゴスラーのダンスも絶賛されている。従って、エーリカのテキストだけで成功の理由を判断することは出来ないが、上でヒルシュ＝リントベルクが言うように、始めはユーモアをまじえた日常生活の滑稽な描写で観客の笑いを誘い、その意味で軽妙で無邪気な導入から一転して、現実の政治にテーマを移し、どぎつい表現で戦争の脅威を説き、最後は本来のメッセージである抵抗の必要を訴える。静かなユーモアで始まり、間に叙情的なフレーズを差しはさみながら、最後はまじめな政治的メッセージを投げかけて全体を締めくくるといふこのパターンは、他の多くのナンバーにも共通して見られる。当然ながら政治的アピールだけでは娯楽としては成り立たず、また、滑稽さだけではレベルの低い楽しみに留まりやがて飽きられる。ふんだんに笑いを込めながらも、滑稽の中に深刻なテーマを盛り込み、さらにそれを詩的なオブラートで包んだことが、この作品が多くの教養人を含むチューリヒの市民の間にも支持を得た大きな理由と考えられる。むろんこの特長を舞台で最大限に生かしたギーゼの演技は当然として、ヘニングがこの曲につけたメロディーも成功に大きく寄与したであろうことは容易に想像できる。このチューリヒでのプフェッファーミュレの評判に刺激され、スイス人によって新たに結成された政治的キャバレー・コルニション (Cabaret Cornichon 「酔潰キュウリ」) もエーリカの劇団と並んで大評判をとることになるが、基本的に同じ戦略を踏襲している。

さらにプフェッファーミュレのもう一つの特徴は、意図的に曖昧な表現に徹し、ファシズムを批判しながらも、直接ナチスドイツを名指ししてはいないことである。エーリカは戦後インタビューの中でプフェッファーミュレに触れて次のように言っている。

私たちはどこに行ってもよそ者でした。役所は仕方なく、直接政治に関わる一切

の活動を禁止するという条件で我々の滞在を我慢してくれたのです。ナチ帝国は近隣諸国であまりも強大で身近な存在でした。権力者を刺激することは、たとえそれが亡命ドイツ人たちによる抵抗であったとしても、一切禁止されていました。従って「いつでも間接的に！」これが私たちのモットーでした。名指ししない、荒んだ我々の国の名前さえ出さない、そうせざるを得ませんでした。喩えや比喩、童話の形をとりました。誤解を与えないよう工夫し、しかし文字通りの意味で、罪がないよう努めました²⁴⁾。

「X 婦人」でもオーストリアの国名以外、直接ドイツやヒトラーなど特定の国や人物を名指してはいない。„aus manchem Reich“のラジオ放送、„Der Vogel Strauß macht große Politik“ などという言葉で暗にヒトラーのナチス第三帝国を暗示し、当然、当時の観客にはその意味するところはわかっていたはずであるが、表面上は比喩を用いた多義的な表現に留まっている。その結果、多くの新聞が好意的な論評をする中、左翼系の新聞からは逆に「胡椒が少なく辛さが足りない」という批判を受けることにもなった。

もちろん、直接名指しはしなくとも、このような半ば公然としたナチズム批判が行われ、しかも大評判をとった結果、当然ながらドイツ政府も強い関心を抱き、またスイス国内でも、ナチズムに共鳴しヒトラーの成功で意気の上がったスイスの国家社会主義団体「国民戦線」(Nationale Front)を始めとする、いわゆるフロンティストたちの反発を招き、攻撃のターゲットとなった。公然とファシズムを批判する娘エーリカや長男クラウスと違い、はっきりとナチスドイツに反対する立場を公に表明することを避けていたトーマス・マンは、旅券延長の申請でドイツ総領事館を訪れた際「すべての領事館に延長停止の命令書が回っているとのこと。[…] 領事は私を呼び寄せエーリカと彼女の〈軽率さ〉について善処を依頼」(1934年2月15日)と日記に記し、スイスで発行されていたナチス系の新聞「帝国ドイツ人」(Der Reichsdeutsche)紙は、激しく彼女を攻撃する。

例のマンの娘エーリカ・マンは、もっぱらシナゴークを住まいとしているようだ

が、日々、自分の劇団〈プフェッファーミュレ〉で毒を吐き散らし、ドイツ的であるところのものを片っ端から容赦なく自分の汚物で汚している。彼女の活動の場はあの追い出された人たちの集合場所となっており、彼らは真にドイツ的な文化を嘲ることにだけ満足を感じているのだ²⁵⁾。

そして、プフェッファーミュレの「終わりの始まり」²⁶⁾となった事件がおこる1934年11月には「国民戦線」の「亡命者たちの横暴に反対しよう！」と題した抗議集会在予定されることになる。彼らフロンティストたちが配布したビラには、ちょうど同じ月にチューリヒ劇場で上演されていた亡命共産主義者フリードリヒ・ヴォルフの戯曲「マンハイム教授」らと並べて、筆頭には「国家と祖国一切を汚そうとしているユダヤ人の亡命キャバレー〈プフェッファーミュレ〉に反対する」²⁷⁾と記されている。

プフェッファーミュレ事件

チューリヒに亡命後、スイスはもとよりヨーロッパ各地の客演で大きな人気を博すことになったプフェッファーミュレがスイスで激しい攻撃にさらされ、ボイコットを受けることになったのは、翌年1934年秋の第3プログラムで起こった騒動がきっかけであった。この新しいプログラムは10月3日、これまでの巡業でいつも大好評であったバーゼルで始まり、その後スイス各地を回って、11月にチューリヒに戻る。チューリヒでの公演は、それまでのホテル・ヒルシェンが、プフェッファーミュレに倣い新たにスイス人によって結成されたキャバレー・コルニションの本拠地となっていたため、クーアザールに場所を変更して行われる。公演中に客席でちょっとした妨害行為はすでに幾度もあったが、11月16日の公演では大きな騒動に発展する。この事件は当時の調査資料によれば、次のようなものであった。

劇場では、観客のジェームズ・シュヴァルツェンバッハが〈私が望むから〉の演

技の間と、それからウィーンのスケッチ〈グリーンツィング〉の後に、軍隊で命令に使われる笛を吹いて騒ぎを起こすように合図を送った。一声に口笛が吹かれ、ヤジが飛び「ユダヤ人出て行け」という叫びが響いた。催涙ガスの瓶が床に投げつけられ、殴り合いに発展した……²⁸⁾

数日前からエーリカの元に脅迫状が送りつけられていたため、当日、会場で警備に当たっていた警察官は妨害の当事者を逮捕し外に連れ出だそうとするが、外で抗議デモを行っていたフロンティストたちが劇場になだれ込み、さらにエーリカを支援する共産主義者たちとが衝突して、乱闘は街頭に広がり、警察は威嚇発砲し負傷者が出る騒ぎとなった。

この事件が最初から意図されたものであったのか、あるいは偶然が重なった結果なのかは細かなところで明確でない部分も多いようであるが、最初に合図を出して妨害行為を扇動したジェームズ・シュヴァルツェンバッハがターゲットとしたのは、舞台上でテレーゼ・ギーゼによって演じられた「私が望むから」(Weil ich will) という歌であった。ギーゼは黒いドレスに長い真珠の首飾りを身につけた裕福な貴婦人の姿で演じている。

Spürt Ihr die Sinnlichkeit?	欲望が感じられますか
Sie weht herauf zu mir, —	私のところに吹き上げ
Die gute Sinnlichkeit umweht mich wie ein Wind	激しい欲望は風のように私の回りを取り巻いています
Sie kommt von Mann und Weib	男からも女からもやって来て
Und sie kommt, sag und schreib,	そう、やって来るのです、
Von Katz und Maus und Hund und Ding und Kind.	猫や鼠や犬、物や子供からも

Ich selbst bin kalt wie Schnee,	私自身は雪のように冷たく
Mir tut das Herz nicht weh	心が痛むこともなく
Ich spüre hier nicht viel und gar nichts hier.	ここではほとんど何も感じません
Jedoch ich weiss genau,	しかし私は意志の強い女で

Als willensstarke Frau, —	よく知っているのですが
Ich will die Sinnlichkeit für Mensch und Tier.	人間や動物のために欲望を望むので す

Weil ich will,	私が望むから
faszinier ich,	魅了し
Weil ich will,	私が望むから
reussiere ich.	成功を収めるのです
drum begehrt man mich,	だからみんなは私を求め
Wie ich will,	私が望むから
So verehrt man mich.	みんな私を称えるのです

Das ist auf Erden so:	この世はそうしたものです
Die Menschen werden froh,	人間が陽気になるのは
Wenn einer irgend etwas wirklich will.	誰かが本当に何かを望んだときです
Sie freun und neigen sich	彼らは喜び、なびき
Und sie verbeugen sich,	身をかがめ
Sie senken Ihre Stirn und halten still.	平身低頭して黙ります

Was so ein Wille will,	意志が何を望むか
Ist wirklich einerlei, —	そんなことはどうでもいいことです
Wenn er das Schlechte will,	たとえ悪事を望んだとしても
Ists auch egal.	全然かまいません
Es kommt nur darauf an,	大事なのは
dass einer wollen kann, —	誰か欲する人がいるということです
Denn dann gehorchen wir Ihm allemal.	その時こそ我々は 彼にいつでも従うのですから

Weil er will,	彼が望むから
schenkt man ihm die Macht,	みんなが彼に権力を与え
Weil er will,	彼が望むから
Wird der Tag zur Nacht,	昼は夜となり

Weil er will,	彼が望むから
Heisst das Schlechte gut,	悪事は善となり
Weil er will,	彼が望むから
Stinkt die Welt nach Blut.	世界は血生臭いのです
Ich überlege mir	私は考えます
Hinter dem Löckchen hier	この巻毛の頭の内
/worüber Ihr gewiss nicht lachen sollt!/ Wie wär denn bitte das,	(皆さん笑わないで下さい)
Wenn einer mal zum Spass	もしも誰かが一度戯れに
Was ausgesprochen Gutes wollen wollt?!	はっきりと善を望みたいと思うなら 世の中どうなるだろうか、と
Und ganz von ungefähr	全くの偶然から
Käm so ein Wille her,	このような意志が生まれ
Und sagte jeden Tag: ich will, ich will.	毎日こう言ったとしたら。私は望む
Ich will Gerechtigkeit	正義を望み
Und eine neue Zeit	新しい時代と
Und Frieden überall, das ist mein Ziel.	世界の平和、それが私の目標だ
Und:	そうすれば、
Weil er will	彼が望むから
Ordnet sich die Welt,	世界に秩序が保たれ
Weil er will,	彼が望むから
Kriegt der Arme Geld.	貧しい者もお金を得て
Weil er will	彼が望むから
Wirds mit einem Schlag,	たちまちのうちに
Wie er will	彼が望むから
In den Köpfen Tag.	頭の中が明るくなります
Jeder schreit:	誰もがこう叫びます

Ich hab's längst gesagt,	昔から言っているように
Höchste Zeit,	今こそが
dass es einer wagt, —	誰かそれをやるときです
Was der will,	その人が望むことは
Das hat Richtigkeit,	正義であり
Und so bleibts	そしてそのまま
Jetzt und alle Zeit. ²⁹⁾	永遠に正義であり続けるのです

検閲を配慮しなければならないこともあってかなり曖昧な表現に徹しているが、第六連の「彼が望むから／悪事は善となり／彼が望むから／世界は血生臭い」などという表現から、はっきり名前は挙げていなくともヒトラーの意志を揶揄し、悪に対し盲目的に従う民衆を批判したものであることは容易に想像できる。実際エーリカの詩に曲をつけたヘニングもヒトラー以外には頭になかったといっている³⁰⁾。しかし、まさにこの曖昧さゆえにこのテキストは二重の意味を持つことになり、少なくとも事件の首謀者のジェームズ・シュヴァルツェンバッハにとってこの歌詞は、当時スイスで問題になっていた「ヴィレ事件」を当て擦ったものであり、身内への攻撃と感じられ、憤激したのである。

スイスの上級軍司令官の地位にあったウルリヒ・ヴィレ将軍は1934年3月ドイツを訪れた際に、旧来からの親しい友人であったナチス幹部のルードルフ・ヘスとカール・ハウスホーファーとミュンヘンで会食をする。たまたまその場に首相ヒトラーが居合わせたことが知られるに及んでスイスの中立を危うくする軽率な行為であると批判され、その年の秋になって彼の軍司令官としての資質をめぐる新聞各紙がこの問題を取り上げ、ちょうど11月には国会でも追及されていたのである。

ヴィレ家はスイスにおける親ドイツ派の中心的な存在であった。ウルリヒの祖父で、詩人コンラート・フェルディナント・マイヤーのパトロンとして知られる文筆家フランソワ・ヴィレの代にドイツからスイスに移住し、父親

ウルリヒはクララ・フォン・ビスマルクを妻とし、スイスの軍隊をドイツ式に改編、第一次世界大戦が始まるとスイス軍元帥に就任して、大戦中、軍の親フランス派から批判を受けながらもドイツに対して友好的中立を守った。息子ウルリヒも父親に倣い軍人となったが、彼の二人の妹のうちエリーザベトはチューリヒの門閥貴族エルラッハ家へ、末の娘ルネは裕福な財閥シュヴァルツェンバッハ家に嫁ぐなど縁戚関係によってスイスの政治と経済に強い影響力を持っていた。さらに彼の娘の一人は、当時の在スイスドイツ大使エルンスト・フォン・ヴァイツゼッカーの息子で物理学者のカール・フリードリヒと結婚するなどドイツとの結びつきもいっそう深めていた。

作家アンネマリー・シュヴァルツェンバッハ（Annemarie Schwarzenbach, 1908-1942）は、ヴィレ家からシュヴァルツェンバッハ家に嫁いだルネ・シュヴァルツェンバッハ＝ヴィレの娘で、熱狂的なヒトラー賛美者であった母親とは異なり、左翼的な考えの持ち主であり、また、エーリカ、クラウス姉弟とも極めて親しい友人であった。彼女は、プフェッファームューレの、スイスでの公演許可の条件であった最低二人のスイス人俳優を雇う際、適当な人物を捜すのに苦勞していたエーリカに知り合いを紹介している。また、クラウスが亡命者たちを糾合し、全体主義と戦うために1933年9月アムステルダムのカヴェリード書店で発行された雑誌「集合」（Die Sammlung）の共同編集者の一人に名を連ね、この雑誌のために発刊資金を提供し、さらに1934年8月、モスクワで開かれたソヴィエト作家会議（der Erste Allunionkongress der Sowjetschriftsteller）にもクラウスとともに参加している。当然ながらプフェッファームューレを率いるエーリカも反ドイツ的な「集合」誌を発行するクラウスもナチスドイツ政府にとっては目障りな存在であり、この二人と行動をとるアンネマリーはナチスドイツに心酔する母親ルネ・シュヴァルツェンバッハ＝ヴィレにとって悩みの種であった。2004年に曾孫アレクシスによって書かれたルネ・シュヴァルツェンバッハ＝ヴィレの伝記では、家に残された未公開の資料に基づいてシュヴァルツェンバッハ

家の側からこの「プフェッファームューレ事件」にいたるまでの経緯が詳細に描かれているが³¹⁾、愛娘アンネマリーとの確執がいかに深いものであったかが知られる。当時のチューリヒ・ドイツ総領事がベルンの大使館に宛てた報告には、

[アンネマリーは] 家族の中で非常に厄介な子供になっています。彼女は早くから文学活動を行い、これらの方面で作家トーマス・マンの子供エーリカとクラウスと親密なつきあいを持ちました。シュヴァルツェンバッハ夫人（母親ルネ）はこれに驚き、既に2年前からエーリカ・マンが家に入出入りすることを禁止しています。しかし、それまでは娘が実家との関係を完全に絶ってしまうことを恐れて、エーリカとクラウスとの交際を厳しく禁止することは避けていたのです。[..] 最近シュヴァルツェンバッハ夫人に会った際に、娘さんはどうしていますかと訪ねたら、大変うちひしがれた様子で、ただ「アムステルダム、クヴェリード書店、クラウス・マン！」とだけ答えました³²⁾。

とあり、また、政治的な活動だけでなく、娘アンネマリーのドラッグへの依存癖やホモセクシュアルの性向などもすべて「悪名高い」マン姉弟のせいであると考へ、極力この二人から娘を遠ざけようと考えていた。

少なくともエーリカ自身は、この事件の黒幕はアンネマリー・シュヴァルツェンバッハの母親ルネであり、騒動は彼女の自分に対する憎しみから引き起こされたものであると考えた。つまり、この騒動はプフェッファームューレがもはやスイスで公演活動を続けられない状態に追い込むために意図されたものであり、エーリカを娘から遠ざける目的で最初からルネによって計画され、そしてそのためのかっこうの口実として「私が望むから」の演目が狙われたというのである。事件当日、騒動を扇動したジェームズ・シュヴァルツェンバッハはルネの甥にあたり、アンネマリーとは従兄弟同士であった。

既に事件の数日前から激しさを増していたプフェッファームューレに対する一連の抗議行動についてトーマス・マンは、日記で「エーリカの確信によれば、背後にいるのは老シュヴァルツェンバッハ夫人、この女のヒステリー、

資本家の不安と憎しみ」(1934年11月12日),「シュヴァルツェンバッハ夫人が金で雇った乱暴者たちのスキャンダル」(11月13日)と記し,事件翌日には「昨日の騒動は,フロンティストたちがクアハウスに押しかけ,警官が発砲,逮捕(逮捕者の中にシュヴァルツェンバッハ青年),煽動者の馬鹿げた怒り,観客はエーリカに拍手,警察は毅然として彼女の味方。警察による詳しい調査が行われれば老シュヴァルツェンバッハ夫人にとっては迷惑の上ないことであろうが,しかしながら公演にとっても致命的な結果をもたらすことになるかもしれない」³⁹⁾(11月17日)と書いている。「亡命劇団」プフェッファームューレは政治的な騒動に巻き込まれることによって,これを口実にスイスで公演が禁止される恐れは十分あったのである。

本当にアンネマリーの母親ルネ・シュヴァルツェンバッハ＝ヴィレが直接指示を出したのか,あるいは甥のジェームズ個人の意趣によるものか,また街頭で抗議行動を行っていたフロンティストたちが劇場内の騒ぎに合流したことで政治的事件に拡大することになったが,これが始めから企図されたものであったのか,あるいは,単に偶然の成り行きでそうなったのか,さらにはテレゼ・ギーゼによって歌われたエーリカの手になるナンバー「私が望むから」が本当にウルリヒ・ヴィレ將軍の事件を意識したものでなかったのか,すでに述べたように細かなところで事件の真相は不明のままである⁴⁰⁾。しかし,仮にすべてが偶然によるものであったにしても,この事件が警察を巻き込み,また,新聞各紙でスイス中に大きく報道された結果,スイスの町でも公演禁止のボイコットが相次ぐこととなった。エーリカは事件の説明を新聞各紙に送り⁴¹⁾,弁明に努め,また問題となったギーゼのナンバーをプログラムから外してチューリヒ公演はそのまま続行するが,その後には予定されていたスイス巡業は多くの州で上演許可が下りず,予定を早めて切り上げることになる。再びチューリヒのような混乱が起こることを恐れたのである。結果的にフロンティストたちの目的は達せられることになった。

中でもグラウビュンデン州のダヴォスはプフェッファームューレの客演を

認めない理由を次のように述べている。ダヴォスはドイツ人の滞在者が多いだけではなく、後にヴィルヘルム・グストロフの暗殺事件が起こって一般に知られることになったが、スイスに密かに深く根を下ろしていたドイツのナチズム運動の拠点でもあった³⁶⁾。

このキャバレーは明らかに第三帝国の現在の状況に反対する立場をとっている。保養地ダヴォスは、比率にすれば他のスイスのどこの町とも比べられないほど、非常に多くのドイツ住民のコロニーとなっており、加えて、多くのドイツ人観光客が訪れている。これらのドイツ人たちの大多数は間違いなく現在のドイツ政府を支持している。この町の議会は、キャバレー「プフェッファームューレ」の文化的な意義をそれほど高く評価することは出来ず、従って、我々がダヴォス住民の住む地域での客演を許可するに正当な理由も持たないのである。

ついでに言うておいていいであろうが、ダヴォスの町がトーマス・マン氏の家族に対して特別に感謝を示さなければならない恩義もない。氏の小説『魔の山』の中では、ここでの保養生活は偏見に満ちた描き方がされていて、そのせいで、疑いなくこの保養地の評判は損われてきたからである³⁷⁾。

エーリカ・マンはプフェッファームューレの基本方針として「決して名を挙げず、いつでも間接的に」という態度をとってきたが、プログラム中の「意志 Wille」という言葉が、単にヒトラーをほのめかしているだけでなく、ヴィレ事件を揶揄していると思われたがゆえに、外国人でありながらスイスの内政を批判していると思なされた。『魔の山』を書いた父親トーマス・マン同様、滞在権 (Gastrecht) の乱用であるという印象をスイス人に与えたようである。

翌年 1935 年はほぼ一年間、プラハやオランダなど外国での公演が中心となり、その都度、各地で以前と変わらぬ大成功を収めているが、その後スイスでの活動はごく稀になる。これまで、事件の後チューリヒ州では「プフェッファームューレ法」(Lex Pfeffermühle) なる条例が制定され、政治的な傾向を持った外国人の劇団の公演が禁止されたと言われていたが、近年の研究ではこのような法律の存在は確認できないという³⁸⁾。しかし事件以後、チュー

リヒでのプフェッファームューレの公演は二度と実現していない。

トーマス・マンは1933年ヒトラー政権の成立直後、公演旅行でドイツを離れ、そのままスイスに居を構える。当初、市民権の剥奪と、それにとまなうドイツ国内での自作の出版禁止を恐れ反ファシズムの態度を明確にしないまま、いわば「半亡命」状態で沈黙を続けていたが、ようやく三年が過ぎた1936年2月になって、「亡命作家たちは二流の作家たちで、トーマス・マンは亡命者ではない」としたノイエ・ツェルヒャー・ツァイツング (Neue Zürcher Zeitung, N.Z.Z.) 紙の編集者エドゥアルト・コロデーに反駁する形で公開書簡を発表し、ナチス政権に反対であるという立場を公式に表明する。そしてノーベル賞作家トーマス・マンのこの宣言は他の多くの亡命者たちを勇気づけることになった。例えば、プフェッファームューレと並んで「亡命ユダヤ人マルキスト劇場」であるとしてフロンティストたちから激しい攻撃にさらされていたチューリヒ劇場の俳優たちも連名でマンに宛てて、

親愛なるトーマス・マン氏へ

Dr. コロデー氏宛の貴殿の手紙を読みました。我々の多くは、この手紙を読み、貴殿に心からの率直なる敬意を表せずにはいられません³⁹⁾。

と、感謝の手紙を書き送っている。この「亡命宣言」に至るまでに、父親トーマスに対する娘エーリカの必死の説得があったことが知られている。エーリカはプフェッファームューレの公演先から、曖昧な態度をとり続ける父親に強い怒りを込めた手紙を送りつけ、最後はほとんど脅迫にも近い縁切り状が、マンを最終決断に導いたとされている。エーリカはこの手紙の中で、父親に対して自分やクラウスら亡命者たちの反ナチス活動に非協力的であり、しばしば裏切り行為があったことを責め、そして、「もし自分の例を引き合いに出してよければ、私にとって非常に辛かったのは、私たちの努力にそれなりに好意的で強い関心を寄せてくれていたはずなのに、あなたがそれを自分の中に留めて、決して表に出そうとしなかったことです。そして〈プフェッファ-

ミューレ・N.Z.Z.紙〉事件で、あの新聞は卑劣この上ないやり方で私と私の劇団の息の根を止めようとしてましたが、あなたは指一つ動かそうともしませんでした。少なくとも個人として新聞の予約購読を停止することくらいは出来たはずですよ。あの時ほど〈怒り〉がこみ上げてきたことはこれまでありませんでした。コロディは、私の小さな劇団など一度も見たことがないくせに、まるで何か下劣で汚らしいもののように論評しています。それにもかかわらずあなたが公然と彼とのつきあい続けているのは全くの論外ですよ」⁴⁰⁾と言っている。ここにも彼女の事件への憤激が感じ取れる。

アメリカ公演の失敗と解散

ヨーロッパ各地で当局の検閲やファシストたちの妨害と戦いながらも1034回の公演で大評判を取り、アメリカ公演に向けて周到に準備し、また有力な支援者たちの成功予想にもかかわらず、プフェッファーマューレはニューヨークでのわずか一回の公演で打ちきり、まもなく解散、消滅する。解散の後、ギーゼやヘニングがヨーロッパに帰る中、そのままアメリカに留まったダンサーのロッチ・ゴスラーは失敗の原因を次のように回想している。

私たちはまずニューヨークで上演し、それからアメリカ各地をめぐって長期の公演旅行をするはずでした。しかし失敗でした。一週間後すべては終わりました。我々のエージェントは二度と上演させませんでした。失敗には幾つか理由がありました。まず俳優たちの英語が十分でなく（あの名優ギーゼでさえもそうでした）、思うままに演じられなかったことです。第二にテーマの大部分がアメリカ人向きではなかったことです（例えば国境を扱ったシャンソン、国境なんてここアメリカにはありません）。第三にはアメリカは当時はまだ〈孤立主義者〉でした。ヨーロッパで起こっている様々な苦難について知りたいなどと思っていなかったのです⁴¹⁾。

弟クラウスは公演当日、日記に「〈ペッパーミル〉初日。非常に興奮。前

半は多少堅かったが後半は大喝采」(1937年1月5日)と書いているように、上演自体は必ずしも不出来なものではなかったようであるが、この公演を取り上げた多くの新聞の批評は否定的なものであった。クラウスはその翌日「〈ミュージーレ〉について非常に下劣で愚かな新聞報道。ひどい」(1月6日)⁴²⁾と憤ることになる。ヨーロッパ流のキャバレーは当時のアメリカではなじみの薄いものであり、アメリカ人には十分理解されなかったのである。そして初日の批評が芳しくなければ直ちに公演を打ち切るというのがアメリカ式の興業であった。エーリカ自身も母親カトヤに宛てた手紙で「初日の公演は一部の新聞でかなりひどい扱いを受けました。アメリカの間はキャバレーを知らないのです——ちゃんとしたショーガールが一人も出てこないのていくらか当惑していました」⁴³⁾と報告している。しかし同時に、伝統的にモンロー主義をとり、またニューディール政策で自国のことに手一杯であった当時のアメリカ人の関心がヨーロッパに向いていなかったことが、公演が不人気に終わった大きな原因であった。結局エーリカ自身後に認めているように「このH. [ヒトラー] はドイツ国内の問題」⁴⁴⁾だったのである。

劇団が解散した後もアメリカに留まったエーリカは講演者としてアメリカ各地を回りファシズムの脅威を訴え続けるとともに、『野蛮人の学校』(School for Barbarians - Education under the Nazis, 1938)、『生への逃走』(Escape to Life, 1939.弟クラウスとの共著)、『光は消える』(The Lights Go Down, 1940)等の著作を通してドイツの現状と亡命者たちの運命をアメリカ人に紹介し⁴⁵⁾、大きな成功を取めることになる。彼女はアメリカ中を回りながらある講演で次のようにいっている。

「講演」(lecturing)というのは真にアメリカ的な商売です。世界でこんな職業が認知されているところは他にどこにもないでしょう。旅行して回って講演をする、こんなことで暮らし生活の糧を得ることが出来るなどという国は他に私は知りません⁴⁶⁾。

結果的に、アメリカではドイツの問題に関心を向けさせるためには、風刺や皮肉によるメッセージを娯楽的要素の中に盛り込んだ政治的文学キャバレー、プフェッファームューレはなじまず、もっと直接的な方法が必要であったことになる。その後彼女はジャーナリストとして活動を続け、戦争中はロンドンのドイツ人向けBBC放送に関わり、また、軍に従い報道記者として戦場となったヨーロッパをレポートしている。

ファシズムとの対決という使命を持ったエーリカ・マンのプフェッファームューレは、アクチュアルなテーマを扱ったがゆえに、当然のことながら、当時そこで歌われ大評判をとった詩も曲も時代とともに忘れ去られてしまった。歴史的役割はそこで終わったのである。一時この劇団にも関わった作家ヴォルフガング・ケッペン是最初の長編小説『不幸な恋』(Eine unglückliche Liebe, 1934)の中で、かつての恋人で劇団創設以来のメンバーであったシビュレ・シュロスモデルにしている⁴⁷⁾。そこではスイスでのプフェッファームューレの様子も生き生きと描かれ、キャバレーと比較すれば寿命の長い小説の方は、現在まで読みつがれている。また、スイスにドイツのキャバレーの文化を持ち込み、根付かせた功績も決して見逃すことは出来ない。チューリヒは第一次世界大戦中のダダイストたちによるキャバレー・ヴォルテールの活動以来、スイスはキャバレー文化とは無縁であった。しかしプフェッファームューレがスイス中で大評判をとったことで、これに刺激され、その旗揚げの地ホテル・ヒルシェンが拠点となってスイス人による最初のキャバレーといわれるコルニションが誕生する。コルニションは、エーリカに「剽窃」⁴⁸⁾と詰られながら、一時プフェッファームューレと拮抗する人気を博し、エーリカのプフェッファームューレ解散の後も、反ファシズムを看板に掲げる政治的キャバレーとして国境を越えてその名が知られることになった。コルニションの他にも、数多くのキャバレーがスイスに生まれ活動している。戦後、エーリカ自身が「私たちは、スイスのキャバレーすべての産みの親と見なされている」⁴⁹⁾と述べているが、これも、決して理由のないことではないので

ある。

《注》

- 1) Klaus Mann: Der Wendepunkt. Ein Lebensbericht (The Turning Point, New York 1942) 18. Aufl. mit einem Nachwort von Frido Mann, Reinbek bei Hamburg 2006, S.392.
- 2) [von Joseph Roth, Amsterdam Frühjahr 1935] Erika Mann: Briefe und Antworten. Band 1: 1922-1950, hrsg. v. Anna Zanco Prestel, München 1988, S.66.
- 3) Ute Kröger: 《Wie ich leben soll, weiss ich noch nicht》—Erika Mann zwischen 《Pfeffermühle》 und 《Firma Mann》. Ein Portrait, Zürich 2005, S.9.
- 4) Erika und Klaus Mann: Escape to Life. Deutsche Kultur im Exil, hrsg. v. Heribert Hoven, Reinbek bei Hamburg 1996, S.16.
- 5) Andrea Weiss: Flucht ins Leben. Die Erika und Klaus Mann-Story, 3. Aufl. Reinbek bei Hamburg, 2002, S.66.
- 6) K. Mann, Der Wendepunkt, S.360 f.
- 7) Klaus Mann: Tagebücher 1931-1933, München 1989, S.31.
- 8) Völkischer Beobachter, 16. Januar 1932. Helga Keiser-Hayne の資料図版より引用。Helga Keiser-Hayne: Erika Mann und ihr politisches Kabarett „Die Pfeffermühle“ 1933-1937. (Erweiterte Neuauflage) Reinbek bei Hamburg 1995, S.9.
- 9) Irmela von der Lühe: Erika Mann. Eine Biografie, 6. Aufl. Frankfurt a. M. 2002, S.89. なお新聞のいう「必ずしも頭らしくない物体」に反駁し、これが歴とした頭であることを証明するためにエーリカは法廷に自分の顔写真を提出したという。
- 10) Thomas Mann: Von deutscher Republik [Vorwort]. In: Thomas Mann „Von deutscher Republik. Politische Schriften und Reden in Deutschland“, Gesammelte Werke in Einzelbänden, Frankfurter Ausgabe, hrsg. v. Peter de Mendelssohn, Frankfurt a.M. 1984, S.116.
- 11) Martin Weichmann: Der „Fall Erika Mann“ — Ein Theater auf dem Weg ins Dritte Reich. In: Die Gazette 3, 2004, Web-Version (<http://www.gazette.de/Archiv2/Gazette3/Weichmann.html>)
- 12) 上告審は翌年のナチス政権の成立とエーリカ亡命後の 1934 年まで続き、うやむやの内に終了する。
- 13) クラウス・マンの回想録『転回点』によれば、エーリカと契約していた劇場や放送局のボイコットが相次いだという。K. Mann, Der Wendepunkt, S.362.
- 14) Helga Keiser-Hayne: Erika Mann und ihr politisches Kabarett „Die

Pfeffermühle“ 1933-1937. (Erweiterte Neuausgabe) Reinbek bei Hamburg 1995, S.15.

- 15) I. von der Lühe, S.96.
- 16) ほぼ5年にわたる1034回の公演のテキストのほぼ85パーセントがエーリカの手になり、他に弟のクラウス、ヴァルター・メーリング、ハンス・ザール、ヴォルフガング・ケッペンの作品が上演された。I. von der Lühe, S.97.
- 17) プログラムには「演出：テレゼ・ギーゼ」とあるものの、メンバーの一人であったイーゴル・パーレンによれば、実際には各演目の出演者が自分の役を工夫したという。Heinrich Breloer: *Unterwegs zur Familie Mann. Begegnungen, Gespräche, Interviews*, Frankfurt a. M. 2001, S.365. [Gespräche, Igor Pruzan-Pahlen]
- 18) K. Mann, *Der Wendepunkt*, S.391.
- 19) ヒトラーも彼女の崇拜者の一人であり、ナチスの機関紙フェルキシャー・ベオーバッハター紙は「このユダヤ人ばかりの劇場について真のドイツ女性が現れた」と賞賛し、ギーゼが真のユダヤ人と知られた後も、彼らの賞賛はやまず、亡命先のスイスからミュンヘンに呼び返そうと努力したという。Threse Giehse: „Ich hab nichts zum Sagen“ Gespräch mit Monika Sperr, München, Gütersloh, Wien 1973, S.34.
- 20) Thomas Mann: *Tagebücher 1933-1934*, hrsg.v. Peter de Mendelssohn, Frankfurt a. M. 1977, S.199, S.210.
- 21) H. Keiser-Hayne, S.83, S.118 より引用。
- 22) „Frau X.“ H. Keiser-Hayne, S.72 より引用、但しト書きおよびリフレインの一部を省略。
- 23) H. Keiser-Hayne, S.84 より引用。
- 24) Th. Giehse, S.53 より引用。
- 25) Ursula Amrein: *〈Los von Berlin!〉 Die Literatur- und Theaterpolitik der Schweiz und das 〈Dritte Reich〉*, Zürich 2004, S.423 より引用。
- 26) H. Keiser-Hayne, S.154.
- 27) Flugblatt zur öffentlichen Kundgebung der Nationalen Front in Zürich am 21. November 1934. H. Keiser-Hayne, S.157 より引用。
- 28) Zürcher Stadtratsprotokoll vom 15. Dezember 1934. H. Keiser-Hayne, S.154 より引用。
- 29) テクストはヘルガ・カイザー＝ハイネが収録したタイプ原稿のファクシミリ版により、表記もそのまま。H. Keiser-Hayne, S.134f.
- 30) H. Keiser-Hayne, S.155.
- 31) Alexis Schwarzenbach: *Die Geborene. Renée Schwarzenbach-Wille und ihre Familie*, Zürich 2004, S.265 ff.

- 32) Deutsches Generalkonsurat Zürich an Deutsche Gesandtschaft Bern, 4. Juli 1934. A. Schwarzenbach, S.275 より引用。
- 33) Th. Mann: Tagebücher 1933-1934, S.565, 566, 568.
- 34) ニクラウス・マイエンベルクによれば、スイスの国家社会主義運動フロンティストの指導者ロルフ・ヘネはかつてアンネマリーに思いを寄せ失恋の恨みから、彼女の愛人エーリカを攻撃したのであるという。Niklaus Meienberg: Die Welt als Wille & Wahn. Elemente zur Naturgeschichte eines Clans, Zürich 1987, S.115. なお、ジェームズ・シュヴァルツェンバッハ自身は過去にフロンティストと関わりはあったが、事件当時は右翼団体のメンバーではなかった。また、演目については単に詩句(Weil ein Wille will,...)がウルリヒ・ヴィレへの当てこすりと思われただけでなく、舞台でのギーゼの扮装がルネ・シュヴァルツェンバッハ=ヴィレ自身を揶揄したものと見なされても仕方なかったという。A. Schwarzenbach, S.283.
- 35) E. Mann, Briefe und Antworten. Bd. 1, S.57 ff. [An verschiedene Redaktionen in der Schweiz, 22. 11. 1934]
- 36) Werner Rings: Schweiz im Krieg 1933-1945. Ein Bericht, Zürich 1974, S.47ff. 参照。ドイツの作家ギュンター・グラスも『蟹の横歩き』(2002年)の中で扱っている。
- 37) H. Keiser-Hayne, S.160 より引用。
- 38) „Lex Pfeffermühle“ については戦争中スイスで亡命生活を送った旧東ドイツの研究者ヴェルナー・ミッテンツヴァイが指摘し、エーリカ・マンの書簡集の編集者プレステルもこれを踏襲している。Werner Mittenzwei: Exil in der Schweiz, Leipzig 1981, S.226. Erika Mann: Briefe und Antworten, Bd. 1, S.59 (Anm. v. A. Z. Prestel) および H. Keiser-Hayne, S.161.
- 39) Ursula Amrein, S.447 より引用。
- 40) Erika Mann, Briefe und Antworten. Bd. 1, S.86ff. [An Thomas Mann, 26. 1. 1936] なおここで〈プフェッファームューレ・N.Z.Z紙〉事件と呼ばれているのは、1934年の11月の騒動の後、他の新聞はエーリカの弁明書を掲載したのに、N.Z.Z紙はこれを拒否し、逆に騒動の首謀者ジェームズ・シュヴァルツェンバッハが一方向的にエーリカを批判した意見書を載せたことをいう。
- 41) Aus dem Antwortbrief an Helga Keiser-Hayne, 22. August 1989. In: H. Keiser-Hayne, S.189.
- 42) Klaus Mann: Tagebücher 1936-1937, München 1990, S.97, S.98.
- 43) E. Mann: Briefe und Antworten. Bd.1, S.110. [an Katia Mann, 1. 2. 1937]
- 44) Th. Giehse, S.57 より引用。
- 45) これらの本は近年ドイツで次々に復刊され現在でも入手できる。„Zehn Millionen Kinder. Die Erziehung der Jugend im Dritten Reich“ München

1986. „Wenn die Lichter ausgehen. Geschichten aus dem Dritten Reich“ Deutsch von Ernst-Georg Richter, Reinbek bei Hamburg 2005. „Escape to Life, Deutsche Kultur im Exil“ Reinbek bei Hamburg 1996. またエーリカがアメリカで行った講演も次の本にまとめて収録されている。Erika Mann: Blitze überm Ozean. Aufsätze, Reden, Reportagen, hrsg. v. Irmera von der Lühe und Uwe Naumann, Reinbek bei Hamburg 2001.
- 46) E. Mann, Blitze überm Ozean, S.266. [„Aus dem Leben einer Vortragreisenden“ 1945]
- 47) 現在手に入るペーパーバック版は表紙にシビュレ・シュロスの写真を使っている。Koeppen, Wolfgang: Eine unglückliche Liebe. Roman, Frankfurt a. M. 1977.
- 48) An Katia Mann, 7. September 1934. Ute Kröger, S.18 より引用。
- 49) Erika Mann: Briefe und Antworten. Band 2: 1951-1969, hrsg. v. Anna Zanco Prestel, München 1998, S.173. [an Gunther Sauer, 29. 5. 1966]

(たむら・ひさお 政治経済学部助教授)